

## 『ギヤスケル論集』第18号～第27号の目次

### 第18号

江澤 美月「父が犯した罪」の波紋——Elizabeth Gaskell のゴシック短編を中心に」

加藤 匠「ある共同作業の痕跡——Household Words から読むギヤスケル」

木村 正子「Cranfordにおける女性のコミュニティーの意義」

波多野 葉子「ブラッドからブレインへ——My Lady Ludlow に見るギヤスケルの革新性」

### 書評

波多野 葉子「Susan E. Colón, *The Professional Ideal in the Victorian Novel: The Works of Disraeli, Trollope, Gaskell, and Eliot*」

金丸 千雪「Jill L. Matus, ed., *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*」

加藤 匠「Julie Nash, *Servants and Paternalism in the Works of Maria Edgeworth and Elizabeth Gaskell*」

長瀬 久子「ジェニー・ユーグロウ著、宮崎孝一訳『エリザベス・ギヤスケル——その創作の秘密』」

武井 暁子「内田能嗣・塩谷清人編『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』」

田村 真奈美「白井義昭『増補版』シャーロット・ブロンテの世界——父権制からの脱却』」

木村 晶子「西條隆雄・植木研介・原英一・佐々木徹・松岡光治編『ディケンズ鑑賞大事典』」

大野 龍浩「松岡光治編『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化——生誕百五十年記念』」

### 第19号

大嶋 浩「spinster の変遷とその表象——ギヤスケルの spinster たちに関連して」

閑田 朋子「スピンスターいかに生きるべきか——作品に隠された Charlotte Brontë とのやりとり」

西垣 佐理「『ルース』にみる看護と感化力——『荒涼館』との比較をつうじて」

林 美佐「献身の行方——Gaskell 短編小説の主従関係」

## 書評

多比羅 真理子「横山茂雄編『危ない食卓——十九世紀イギリス文学に見る食と毒』」

市川 千恵子「Dinah Birch, *Our Victorian Education*」

小泉 朝子「桐山恵子『境界への欲望あるいは変身——ヴィクトリア朝ファンタジー小説』」

## 第20号

海老根 宏「船乗りの帰還——オースティン、ギaskell、ハーディ」

東郷 秀光「研究の方法、研究の意義を求めつつ——『嵐が丘』、『メアリ・バートン』、『ハムレット』を中心に」

波多野 葉子「オースティンとギaskellの作品におけるメリトクラシー——異なる階級間の結婚を中心に」

木村 晶子「ゴシック文学とギaskell——メアリ・シェリーとの比較から」

木村 正子「演技する女性たち——*Wives and Daughters*に見る女性のアイデンティティと母娘関係」

玉森 彩弥香「娘の父——ミスター・ギブスンの変容」

## 書評

宇田 朋子「木村正俊編『文学都市エディンバラ——ゆかりの文学者たち』」

## 第21号

鈴江 璋子「『ルース』における恋愛と偽装——ハーディの『ダーバヴィル家のテス』を補助線として」

市川 千恵子「〈癒し〉の表象とジェンダー・ロール——『ルース』から〈新しい女〉小説へ」

松本 三枝子「マーティノーとギaskell——『マンチェスター・ストライキ』と『メアリ・バートン』」

芦澤 久江「シャーロット・ブロンテとギaskell——社会小説としての『シャーロット・ブロンテの生涯』」

廣野 由美子「ギaskellとエリオット——『ルース』と『アダム・ビード』に見られる作家の道徳的姿勢」

## 書評

多比羅 真理子「Alan Shelston, *Brief Lives: Elizabeth Gaskell*」

足立 万寿子「松岡光治編『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化——生誕二百年記念』」

## 第22号

大田 美和「ギヤスケルとブロンテのクシアな瞬間と手紙」

小田 夕香理「女性作家について書く——シャーロット・ブロンテとギヤスケルの場合」

江澤 美月「書簡に見られる Gaskell のイタリア統一への関心とマンチェスター——D. G. Rossetti への書簡を参照して」

## 書評

閑田 朋子「Rebecca Styler, *Literary Theology by Women Writers of the Nineteenth Century*」

大野 龍浩「長瀬久子『エリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテ——その交友の軌跡と成果』」

玉井 史絵「松村昌家『ヴィクトリア朝文化の世代風景——ディケンズからの展望』」

中井 真理子「足立万寿子『エリザベス・ギヤスケルの小説研究——小説のテーマと手法を基に』」

## 第23号

松村 昌家「ギヤスケルとマンチェスター美術名宝博覧会」

波多野 葉子「“Lizzie Leigh”——「放蕩娘」の挫折」

木村 晶子「『北と南』における死の表象と対話の可能性」

Yuriko Notsu, “Gossip and the Limits of Female Self-Representation in *Cranford*”

太田 裕子「ギヤスケルとバーボルドの社会観——ユニテリアン女性作家としての共通点」

志渡岡 理恵「マレー社のガイドブックを携えて——“French Life”におけるツーリズム」

## 書評

足立 万寿子「Shirley Foster, *Elizabeth Gaskell: A Literary Life*」

多比羅 真理子「Tatsuhiko Ohno, *The Life of Elizabeth Gaskell in Photographs*」

## 第24号

川端 康雄 「「大衆などというものは存在しない」——レイモンド・ウィリアムズと産業小説」

山本 史郎 「ミシズ・ギヤスケルの『クランファド』」

矢嶋 瑠莉 「ギヤスケルの作品にみる女性の救済」

### 書 評

矢次 綾 「Amanpal Garcha, *From Sketch to Novel: The Development of Victorian Fiction*」

江澤 美月 「松岡光治編訳『ヴィクトリア朝幽霊物語』」

加藤 匠 「武井暁子、要田圭治、田中孝信共編『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』」

西垣 佐理 「Anne DeWitt, *Moral Authority, Men of Science, and the Victorian Novel*」

## 第25号

丹治 愛 「ナショナル・アイデンティティの変遷——オースティンとフォースターのあいだで」

大石 和欣 「ギヤスケル v. ギヤスケル——ユニタリアン男性たちの言説とユニタリアン女性たちの公共圏」

倉田 賢一 「『ルース』を読むジョージ・エリオット」

宮丸 裕二 「社会小説家と社会的な小説家——ディケンズとギヤスケル」

### 書 評

木村 正子 「Gail Turley Houston, *Victorian Women Writers, Radical Grandmothers, and the Gendering of God*」

小宮 彩加 「松村昌家『大英帝国博覧会の歴史：ロンドン・マンチェスター二都物語』」

小田 夕香理 「上野和子、大東俊一、塚田英博、丹羽正子編著『ヴィクトリア朝文化の諸相』」

## 第26号

原田 範行 「ギヤスケルの「ジョンソン」——言語、語り、出版文化」

深澤 俊 「Press-gang をめぐって——Mrs Gaskell と Mr Hardy」

芦澤 久江 「ギヤスケルが描くブランウエルの死」

遠藤 花子「Gaskell の医学への期待——*North and South, Sylvia's Lovers, Wives and Daughters* から見る医学の進歩」

Aiko Matsuura, “Mary Barton in America: Dion Boucicault’s *The Long Strike* (1866) in Transatlantic Theatre”

杉村 藍「二人は何を見つめていたか——ギヤスケルとブロンテの「眼差し」を考える」

#### 書 評

金山 亮太「Mitsuharu Matsuoka, ed., *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*」

猪熊 恵子「日本ギヤスケル協会編『没後百五十年記念 エリザベス・ギヤスケル中・短編小説研究』」

### 第 27 号

金子 幸男「カントリー・ハウスにみるホームの変遷——ギヤスケル夫人、トマス・ハーディ、E. M. フォスターとイングリッシュネス」

阿部 公彦「作家の礼儀作法——エリザベス・ギヤスケル『メアリ・バートン』における「配慮」の機能」

松村 豊子「ギヤスケルは「自分だけの部屋」を望んだのか？——『北と南』に見るモダンの萌芽」

平野 惟「Monkshaven の描写から見る *Sylvia's Lovers* における孤立と分裂」

瀧川 宏樹「『ルース』における子どものイメージ」

#### 書 評

足立 万寿子「巽豊彦著、巽孝之編『<sup>じんせい すみか</sup>人生の住処』」

宇田 和子「Lesa Scholl, Emily Morris and Saria Gruver Moore, eds., *Place and Progress in the Works of Elizabeth Gaskell*」

大田 美和「岩上はる子、惣谷美智子編著『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像』」

宇田 朋子「多比羅眞理子編著『ギヤスケル中・短編小事典』」

桐山 恵子「田中孝信・栗田圭治・原田範行編著『セクシャリティとヴィクトリア朝文化』」